Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-05-11

パーソンズによるデュルケーム読解 ： 『社会的行為の構造』再訪

白鳥, 義彦

(Citation)
社会学雑誌,35/36:68-77

(Issue Date)
2019-07-31

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/E0041982

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/E0041982

パーソンズによるデュルケーム読解

――『社会的行為の構造』再訪――

白鳥　義彦
神戸大学大学院人文学研究科教授

一．はじめに

社会学の歴史を大きくとらえるならば、オーギュスト・コント（一七九八年―一八五七年）によって「社会学」という名が与えられ、その後、コントが没するのとほぼ同時期に生まれた、彼よりも一世代あるいは二世代[1]（若いエミール・デュルケーム（一八五八年―一九一七年）、ゲオルク・ジンメル（一八五八年―一九一八年）、マックス・ヴェーバー（一八六四年―一九二〇年）らによって、学問としての定礎が築かれ、制度化が進められていったと一般に見ることができる。さらに、このように当初ヨーロッパで生まれた社会学は、第一次世界大戦やとりわけ第二次世界大戦を経て、その中心をアメリカに移していった。

ヨーロッパからアメリカへの社会学の移入や、そこでの社会学の確立においては、ロバート・E・パーク[2]（一八六四年―一九四四年）、アーネスト・W・バージェス（一八八六年―一九六六年）らに代表されるシカゴ学派の果たした役割や、タルコット・パーソンズ[3]（一九〇二年―一九七九年）らの影響などが重要なものとして注目される。社会学をあえて経験的な研究の側面と理論的な研究の側面とに分けてとらえるならば、シカゴ学派は経験的な側面において、またパーソンズらは理論的な側面において、とりわけその重要性を位置づけることができる。

本稿では、パーソンズの『社会的行為の構造』（Parsons, 1937＝一九八二）をあらためて取り上げて、同書のなかでパーソンズがデュルケームをどのように論じているのかを検討していくこととしたい。同書は、イギリスのアルフレッド・マーシャル（一八四二年―一九二四年）、イタリアのヴィルフレード・パレート（一八四八年―一九二三年）、エミール・デュルケーム、マックス・ヴェーバーらヨーロッパの経済

学者、社会学者たちを取り上げながら議論を展開し、[4] 行為の理論、とりわけ主意主義的行為理論の提示が行われる。同書は、社会学の学説史上、ヨーロッパからアメリカへの学問の移入を画する著書として位置づけることができ、また、『『社会的行為の構造』の特色は、学説史的研究の基盤上に、新たな理論学説の提起を行った点にある。理論を理論として提示したのでも、学説史を学説史として描いたのでもない。これまでの学説の流れ・展開を描くことを通して、最終的に彼自身の新たな学説の提起へと至っている。これは物語的な戦略による理論提示であるともいえる」[油井、二〇〇八、六五頁]という評価も示される。「話の骨格は、ヨーロッパ社会思想の伝統を、行為理論の枠組みによって再構成することにあった」[同]とされ、さらに、英仏(マーシャル、パレート、デュルケーム)の実証主義的伝統と、ドイツの観念論的思潮(ヴェーバー)との収斂[同、66頁]として、主意主義的行為理論が展開されることとなるのである。

こうした基本的な枠組みを念頭に置きつつ、本稿では、同書における、パーソンズによるデュルケームの読解を題材として、パーソンズがデュルケームのどのような点に注目していたのかを明らかにしていきたい。[5] そして、パーソンズに対するデュルケームの影響をあらためて考察することにより、全体論的視点の重視や、構造主義あるいは構造＝機能主義といったパーソンズの観点の源泉としてのデュルケームといった、従来通説として論じられてきたデュルケーム像とは異なる論点の提示も試みてみたい。

二、デュルケームに関する議論の枠組み

まず、同書におけるデュルケームに関する議論の枠組みとして、デュルケームに関わる部分(邦訳の第三分冊)の目次を示しておこう。デュルケームは、第二部の八章から十一章で取り上げられている。

第八章　エミール・デュルケーム〈その一〉
　　―初期の経験的研究―
一　社会分業論
二　自殺論
三　職業集団と社会主義
第九章　エミール・デュルケーム〈その二〉
　　―社会学的実証主義の方法論―
一　功利主義のディレンマ
二　「社会的」要因
三　集合表象
四　倫理と社会類型
第十章　エミール・デュルケーム〈その三〉
　　―社会統制論の展開―

一　拘束の意味変化
二　倫理的諸困難
三　制度の役割
第十一章　エミール・デュルケーム〈その四〉
　　―最終局面・宗教と認識論―
一　宗教的理念
二　儀礼
三　認識論
第十二章　第二部の要約
　　―行為の実証主義的理論の解体
一　実証主義の出発点
二　マーシャル
三　パレート
四　デュルケーム

パーソンズはまず、デュルケーム理論の発展段階を四期に区分している。①「まだかれにとっての基本的な問題が明確な形で煮詰められてはいない」、初期の［理論］形成期（↓一八九三年の『社会分業論』の時期にあたる）、②「かれがそれまで研究してきた経験的事実に合致し、しかもその当時かれが蒙っていた重要な批判的攻撃をもすべて満足しうるような、その意味でかなりよく統合された理論の一般体系を作り上げた」とされる、初期の綜合期（↓一八九五年の『社会学的方法の規準』、および一八九七年の『自殺論』の時期にあたる）、③「初期の綜合が次第に崩壊し、体系理論における異なった一般的立場が擡頭した」移行期（↓一八九八年の「個人表象と集合表象」、一九〇二年から一九〇三年にかけて行われた講義である『道徳教育論』〔著書としての刊行は一九二五年〕、一九〇七年の「道徳的事実の決定」の時期にあたる）、そして④「こうした新しい一般的立場に立脚しながら、より広範な諸問題が取り上げられ、新しい経験的分野が切り拓かれた。……しかしデュルケームは、これら後期の調査研究を新しい一般的綜合が可能となるほどまでには十分展開しえなかった。早すぎる死がかれの仕事を断ち切ってしまった。かれの提起した基本的諸問題の多くが、解決されずに残された」とされる第四の時期（↓一九一二年の『宗教生活の原初形態』の時期にあたる）、の四つである。［Parsons, 1937, p.304＝一九八二、七―八頁。なお、以下、同書からの引用は、原著および訳書の頁のみ記す］。

各章の副題から見ると、パーソンズが「経験的研究」、「実証主義」、「方法論」、「社会統制論」、「宗教」、「認識論」といった観点に関心を寄せていたことがわかる。また、デュルケーム理論の発展段階の議論においては、生前に刊行された四著作のみならず、『道徳教育論』や「個人表象と集合表象」、「道徳的事実の決定」などにも言及されている点が注目される。

三．パーソンズが取り上げる諸論点

上記のようなパーソンズによるデュルケームの議論の基本的な枠組みを踏まえた上で、次に、パーソンズが取り上げる論点のいくつかを考察していこう。

『社会的行為の構造』では、いわゆるホッブス問題が重要な論点として提示されているが、パーソンズは、功利主義批判の文脈でデュルケームが同じ問題を論じていたことを指摘する。その基盤には、デュルケームが論じた、契約の非契約的要素への注目［pp.311-314＝一八―二一頁］がある。「ホッブス的意味における秩序の問題がデュルケームの研究の論理的な出発点をなし、しかも契約関係の体系に関する功利主義的通説への批判という形をとって秩序問題〔解決〕への接近が計られた以上、分業と社会分化の問題とが絡み合わされるその経緯を理解するのに困難はない」［p.315＝二三頁］と述べられ、ホッブス問題とデュルケームの問題関心との深い関連性が指摘されるのである。

また、個人と社会との関係への着目も、デュルケームの議論に関してパーソンズが繰り返し引き合いに出す論点である。デュルケームの初期の綜合を特徴づけるものとして、「〔社会的〕分業の問題を明確に定式化して以来、かれの関心は、しばしば繰り返された表現を用いれば、社会は固有の実在であるという規定を可能にするような『社会的要因』に集中していた。言い換えれば、デュルケームの根本問題は、ほとんどその初めからといってよいが、個人と社会集団との一般的関係という問題にあった。この問題を取り扱うデュルケームの立場は、これまたほとんどその当初から『個人主義的な実証主義』と呼ばれるあらゆる形態と根本的に対立するものであった」［p.306＝一〇頁］とパーソンズは指摘する。そして、「『個人的』と『社会的』といった分析的区別は具体的実在としての『個人』と『社会』といった弁別とは平行しえないのである。社会は、それを作り上げている具体的諸個人を別にしてはいかなる意味においても存在しようがないように、我々の知悉している具体的個人は、『個人的』要素だけで説明し尽くすことはできない。かれの人格のなかには社会的要素が存在する」［p.337＝五二―五三頁］とも述べられる。さらにこの論点は、「ホッブス問題の水準をずっと深化させる」ことにもなり、「ホッブスが分析した社会的不安定は、合理的に行為する能力をもち、己れの欲することを知っている複数の諸個人というものを前提にしている。しかしこれは、それ自体非現実的な仮定である。自然状態の人間は、功利主義者が想定するような合理的存在ではない。デュルケームの社会学的分析の射程は、単に諸個人の間に存立する秩序の問題、つまり権力の問題に関係するばかりでなく、個々人の人格そのものにおける秩序の要素にまで広がっている」［p.337＝五三

頁」とされる。その上で、こうした個人と社会との関係をめぐる議論については、「『個人的』と『社会的』という古い二元論は、今や三つの異なった形態あるいは側面として立ち現れているということである―その三つの形態とは、『利害』と『道徳的義務』との区別、『俗』と『聖』の区別、そして最後に『経験的』と『範疇的』との区別である」[p.443=二〇一頁]とも述べられ、認識論的な水準にまで至るとされる。

また、パーソンズによって、「幸福」の理論という興味深い視点もあらためて注目される[p.316＝二四頁]。『社会分業論』の第二編、第一章は「分業の進歩と幸福の進歩」と題されていた。パーソンズは、「デュルケームが自殺率のもちうる重要性に注目したのは、社会分化の発展は幸福の追求によって惹起されたという仮説を批判的に吟味した個所においてである」[p.324＝三五頁]として、『社会分業論』と『自殺論』との間の問題関心の連続性を指摘し、さらに、「個人のもつ達成感、したがって幸福感にとって必須不可欠のこの規律は、一人一人が課すものではない。それを課すのは社会である。というのは、規律を課すのは、単なる強制ではないからである。単に力によって課される制限を受け入れたからといって、人々は幸福であるわけではない。その規律は『正しい』ものと承認されなければならない。規律は道徳的権威を身にまとっていなければならない」[p.336＝五〇頁]として、幸福の問題という視点が、個人と社会との関係の問題や、道徳の問題へと接合されていくこととなる。

パーソンズはまた、デュルケームの学問的立場についても論じる。「かれは、個人行為の規範的統制の本質について正しく認識するという地点に達してはいたが、こうした道を辿って、一方では、倫理に関する実証主義の立場を堅持し、他方では、社会的規範に排他的妥当性を与え個人の倫理的独立性を度外視するに至った。こうしてかれの立場は、不幸にも、アブハチ取らずに終わる。かれは真の実証主義からはかけ離れてしまったので、もはや真の実証主義者や功利主義者に自らの科学的正しさを認めさせることはできない。かれらにとってデュルケームは一人の形而上学者である。他方、倫理的理想主義者にとっては、かれは、個人の道徳的自律性という奥義をおおい隠した故に非難される存在である。かれには、唯物論者というきびしい名称さえ相応しい」[p.395=一三四頁]という、ある意味で厳しい評価が示される。ただし、この評価にすぐ続いて、「しかしこうした正当な倫理的異論にもかかわらず、デュルケームの仕事の社会学的な偉大な重要性は、見失われるべきではない。かれは社会統制の本質についてすぐれた洞察を残したばかりではない。道徳的同調の役割と重要性についても多大の洞察を成しとげた。というのは、社会という

存在は、メンバーの道徳的合意に大きく依存すること、それをあまりに極端につき崩せば、その報いは社会の消滅であること、これらは事実であるからである」［同］とも述べられ、デュルケーム社会学の意義が指摘されてもいる。なお「唯物論」という論点に関しては別の箇所でも、「『宗教が社会現象となる』という言い換えではなく、むしろ『社会が宗教現象である』と言った方が、有意味となる。デュルケームの推論が適用できるのは、具体的な現象としての社会ではなく、抽象的な社会的要因に対してである、ということが認識されるなら、このことは、いっそう明白になる。共通の究極―価値態度の体系と定義された抽象的な社会的要因は、実際宗教的観念と分離することは不可能である。こうして『唯物論』という非難は不当となる」［p.427＝一七八頁］とも述べられている。

科学と倫理との関係、学問の実践性、といった観点も、パーソンズが注目するところである。「デュルケームは一徹な実証主義者のすべてと同じように、社会学あるいは他の実証科学は認識のみに関わり、行為の基礎を提供しえない、とする見解を徹底的に否認する。それどころか、実証科学はただ人間生活をよくするための手段となりうる限りにおいて正当化されるのである」［p.368＝九六頁］とされる。

さらにパーソンズは、デュルケームが経験的研究、モノグラフを残したということに繰り返し言及して、この点を高く評価している。これは、経験的研究と理論的研究との関係としてとらえられるが、例えば「道徳」や「宗教」といったデュルケーム社会学の重要な要素からして、一見すると理論的研究を志向していたとも思われがちであるデュルケームが、経験的研究への深い関心を有していたことを示すものであると指摘するのである。例えば、「『自殺論』では、これからも長い間モデルとして残されるような一連の第一次的な調査研究を行なった。経験的な側面と理論的な側面とがこれほどまでに見事に結合したモノグラフ的作品は、社会科学の分野では滅多に見当らない。というのは、一見したところきわめて限定され特定の経験的主題と考えられるものを基礎にして、社会理論の最も幅広く奥深い問題の幾つかを見事に照らし出すような結果にデュルケームは首尾よく辿り着いているからである」［p.303＝六頁］という、『自殺論』についての評価は、理論的観点と経験的観点との関係において、同書が今日においても社会学の主要な古典の一つであるとされる際に述べられる根拠をすでに示している。あるいはまた、これも『自殺論』への言及の文脈においてだが、「思考が発展する場合にしばしばみられることだが、調査研究を行なう間に理論そのものが単に検証されるだけでなく別のものへと変化する。これこそ、ここで第一に関心を惹く点である」［p.324＝三四―三五頁］と述べ、理論的研究と経験的研究との間の有機的な連関を指摘して

いる。さらに、『宗教生活の原初形態』についても、「ここで再びデュルケームが、『自殺論』と同じように、特異な種類のモノグラフを書いたということに注目しておくことは決して時間の無駄ではない。表面的にはほとんど一般的関心を惹かないと思われる専門的で局限された経験的資料を研究しながら、かれはそれを異例に射程の長い理論的推論の手段へと苦労して仕立て上げる。こうして『宗教生活の原初形態』は、一面ではオーストラリアにおけるトーテミズムの専門的モノグラフである一方、それは同時に社会学理論に関するごく少数の最も重要な業績の一つともなっている。無論ここで関心のあるのは後者の側面であるが、その内容に立ち入る前に示しておきたいのは、デュルケームは、この二つの事例において、もっと頻繁に模倣されてもかまわないモノグラフというタイプの研究モデルを作り上げたということである。実際モノグラフは同時にまた理論に関する試論でもあることによってはじめて、それは最高の経験的研究になりうる。デュルケームは、二つの側面を結びつける能力をもち、そのやり方は、かれ以後の社会学者にモデルを提供した。不幸にして両者の結合においてこうした卓越性の域に達しうる人は少ない」[p.411＝一五五―一五六頁]として、理論的観点とともに、そのモノグラフとしての意義を高く評価している。

なお、これと関連する点でもあるが、パーソンズは、従来デュルケームが過度に方法論の観点から読まれてきたとして、先行研究を批判してもいる。「デュルケームは、哲学者あるいは弁証家であって、経験科学者ではないといった結論を導き出してはならない。事実は全く逆であって、かれはその当時の最も偉大な経験科学者の一人であった。かれの理論的見解―それがきわめて難解な方法論的平面に関わるものであっても―とかれが並行して取り組んでいた経験的素材に関する解釈の問題とが、いかに密接に関連しているのか、この点をあらゆる重要な争点ごとに示すこと、これがかれの作品をここで議論する際の主要な課題の一つである。デュルケームは、『非現実的な』空間で理論化を試みたり、『怠惰な思弁』にふけることなく、つねに決定的に重要な経験的問題の解決をめざしていたのであり、まさに科学的理論家そのものであった」[p.302＝五頁]と述べ、また、「かれらの関心がもっぱらデュルケームの方法論的著作に限定された結果、一般読者はこれらデュルケーム論者のものだけを読んでいるかぎり、論じられている当の人物が同時にまた『社会分業論』や『自殺論』の作者でもあることすら知らずに終ってしまう。これほどまでに論じられる方法論的立場に一体デュルケームがどのようにして到達したのか。この点を理解しようとするならば、かれの方法論的見解というものを、かれが用いた概念図式から示唆される幾つかの選択肢を駆使しながら経験的問題をな

んとか解決しようとした試みとして把え返すことが是非とも必要である。経験的側面と理論的側面を一緒に取り扱うことによって、この不幸な分離状態を克服したいというのが、本書でデュルケームを研究することの主要な目標の一つである」[p.303＝六―七頁]とも述べて、こうした形で新たなデュルケーム像を提示する点に、『社会的行為の構造』でデュルケームを取り上げる理由の一つを求めている。さらに、「デュルケームは、この社会的要因およびその位置づけについて体系的な方法論的議論を行なっているが、それを分析するのが我々の議論の次の課題である。しかし忘れてならないことは、この方法論が決して抽象的でも哲学的な思弁でもなく、今素描したような経験的研究から生じた様々の問題や困難によって、あらゆる局面から方向づけられているということである。デュルケームの方法論を論じた非常に多くの人々はこの点を見落としてきたが、この見落としによって弁証法的不毛という印象が生み出された。しかしそれは、デュルケームの本質とは全く無縁なものである」[p.342＝五九頁]とも主張されている。

四．考察

『社会的行為の構造』のテクストに即したパーソンズによるデュルケーム読解を踏まえて、いくつか考察を試みてみたい。

第一に、全体として言えることだが、パーソンズは、自分の理論を導くためという側面も強いとはいえ、デュルケームをよく読みこんでいる。他者の著作を読み込んだ上で、自らの理論を展開する手法は興味深い。

一方、パーソンズは自らの理論を展開するために、デュルケームを「利用」していると感じられるところもある。例えば、「デュルケーム思想のこうした全側面は、いわゆる行為の主意主義的把握―具体的人間が単に適応的役割ばかりでなく、能動的役割をも演ずるそういった過程―を指し示している。この創造的要素は、究極的価値、価値態度、目的、あるいは価値要素がとるあらゆる形態、その社会生活に対する表出様式、といった観念のなかに理論的に定式化されている」[pp.439-440＝一九六頁]という言葉からは、「行為の主意主義的把握」というパーソンズ自身の関心に、デュルケームの議論が重ねられている様子をうかがうことができる。あるいは、社会的事実に関する外在性と拘束性という特性について、環境的、行動主義的なものか、規範的なものか、という形で問いを提起している点［cf.p.383＝一一六頁］なども、「行動主義的」といった語を用いているところなどに、パーソンズ自身による議論の枠組みが反映されているように思われる。

これと関連して、パーソンズには、デュルケームの議論

を持ち上げておいて、「だが」というような形で、その上で批判するという論調も少なからず見られるように思われる。表面的に議論を追っていくと、パーソンズがデュルケームを評価しているのかいないのか、両義的に見える側面もある。こうした論旨の展開は、パーソンズが自分自身の議論に持っていくためとも考えられるが、パーソンズによる議論についての、表面的な読解にとどまらない、より深い理解が必要となる点である。

さらに、パーソンズは、デュルケームによる研究の、モノグラフとしての意義を繰り返し強調している。これは、シカゴ学派に典型的に見られるような、経験的研究を重視する当時のアメリカ社会学の文脈の中での、自らの研究の正当化を示すものとしてとらえることもできるのではないだろうか。さらにまた、例えば、パーソンズによる医療、大学、専門職論といったモノグラフ的研究に見られるような、自らの問題関心の一傾向を示すものとしてもとらえることが可能なのではないだろうか。

これと関連して、全体として、『社会的行為の構造』では、主意主義的行為理論の導出ということが主たる文脈となっており、構造（機能）主義、全体論的なマクロな視点、といったような、デュルケームからパーソンズへの影響といった文脈において一般的に考えられ得るような観点はそれほど強調されてはいない。これは今回『社会的行為の構造』を再訪して、あらためて強く感じた点である。

以上、ささやかではあるが、『社会的行為の構造』に見る、パーソンズによるデュルケーム読解のいくつかの様相を検討した。デュルケームによる研究の、モノグラフとしての意義の強調をはじめ、興味深い論点が明らかになった。こうした論点をあらためて考察することは、広くは古典を読むことの重要性へとも結びつけていくことができるであろう。

註

（1）コントの生年と、デュルケーム、ジンメル、ヴェーバーらの生年との間には、おおよそ六〇年の開きがある。

（2）パークは、一八九九年にベルリンに留学し、ジンメルに学んでいる。

（3）パーソンズは、一九二四年から一九二五年にロンドン・スクール・オブ・エコノミクスに、また一九二五年から一九二六年にはハイデルベルク大学に学んでいる。

（4）マーシャル（四章）、パレート（五章から七章）、デュルケーム（八章から十一章）は「実証主義的伝統からの行為の主意主義的理論の形成」と題された第二部で、ヴェーバー（十四章から十七章）は「理想主義的伝統からの行為の主意主義的理論の形成」と題された第三部で、独立した章を立てて論じられている。「行為の実証主義的理論」と題された第一部の第三章（「行

為理論における個人主義的実証主義の歴史的発展の諸段階」）では、トマス・ホッブス（一五八八年―一六七九年）、ジョン・ロック（一六三二年―一七〇四年）、トマス＝ロバート・マルサス（一七六六年―一八三四年）、カール・マルクス（一八一八年―一八八三年）、チャールズ・ダーウィン（一八〇九年―一八八二年）らもまとめて論じられている。

（5）教科書と研究書ということから多少観点は異なるという留保は付され得るものの、白鳥（二〇一七）では、日本およびフランスの社会学教科書においてデュルケームがどのように取り上げられているかについて論じている。そこでは、デュルケームの生前に刊行された『社会分業論』（一八九三年）、『社会学的方法の規準』（一八九五年）、『自殺論』（一八九七年）、『宗教生活の原初形態』（一九一二年）の四冊の著作、中でも初期の三冊はほぼ必ず言及されていること、一方で、経歴としても、また著作としても、デュルケームにおいて重要な位置を占めている教育については、思ったほどは取り上げられていないことなどが明らかにされている。

参考文献

Durkheim, Émile, 1893, *De la division du travail social: Étude sur l'organisation des sociétés supérieures*, Félix Alcan. ＝一九七一、田原音和訳『社会分業論』青木書店（二〇一七、ちくま学芸文庫）。

――, 1895, *Les règles de la méthode sociologique*, Félix Alcan. ＝一九七八、宮島喬訳『社会学的方法の規準』岩波文庫。

――, 1897, *Le suicide: Étude de sociologie*. ＝一九八五、宮島喬訳『自殺論―社会学研究』中公文庫（二〇一八、改版）。

――, 1898, "Représentations individuelles et représentations collectives", dans *Sociologie et philosophie*, 1924, Félix Alcan, pp.1-48. ＝一九八五、佐々木交賢訳「個人表象と集団表象」同訳『社会学と哲学』恒星社厚生閣、一一―五二頁。

――, 1907, "Détermination du fait moral", dans *Sociologie et philosophie*, 1924, Félix Alcan, pp.49-90. ＝一九八五、佐々木交賢訳「道徳的事実の決定」同訳『社会学と哲学』恒星社厚生閣、五三―八九頁。

――, 1912, *Les formes élémentaires de la vie religieuse: le système totémique en Australie*, Félix Alcan. ＝二〇一四、山崎亮訳『宗教生活の基本形態―オーストラリアにおけるトーテム体系』（上・下）ちくま学芸文庫。

――, 1925, *L'Éducation morale*, Félix Alcan. ＝一九六四、麻生誠・山村健訳『道徳教育論』（1・2）明治図書（二〇一〇、講談社学術文庫）。

Parsons, Talcott, 1937, *The Structure of Social Action: A Study in Social Theory with Special Reference to a Group of Recent European Writers*, McGraw Hill ed.（引用は、一九四九年の The Free Press 版による）＝一九八二、稲上毅、厚東洋輔共訳『社会的行為の構造―第三分冊デュルケーム論』木鐸社。

白鳥義彦、二〇一七、「テクストから見るデュルケーム受容」『紀要』第四四号、神戸大学文学部、八九―一〇七頁。

油井清光、二〇〇八、「行為と社会システム　T・パーソンズ『社会的行為の構造』『社会体系論』」井上俊・伊藤公雄編『社会学ベーシックス2　社会の構造と変動』世界思想社、六五―七四頁。